

2020年教育改革について

12月6日に2015年の国際的な学習到達度調査（PISA）の結果が公表されました。PISAはOECD加盟国の15歳児について、「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」の3分野を調査します。その結果、日本は「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」の2分野の平均点の順位は、「脱ゆとり政策」を採用してから回復基調にあり、今回も過去最高でした。「読解力」の平均点は前回より低下していました。

そもそも、戦後の教育は10年に1度改訂される「学習指導要領」によって学習の方向性や学力観が決められてきました。平成10年改定で前年の指導内容の2割減、いわゆる「ゆとり教育」が導入されました。その結果、学力低下問題が顕著になり、平成20年改定（現行の指導要領）から「脱ゆとり」方針に転換しました。

そして2年後に迫った平成30年改定で、知識偏重の詰め込み型教育から、思考力・判断力重視型教育への本格的な転換を図ると思います。

具体的には、2020年に従来のセンター試験を廃止し、高校の段階で知識レベルを測る「基礎学力テスト」・「大学入学希望者学力テスト」を実施し、大学入試では思考力・判断力を問うような小論文や面接が導入されると見られています。

これを受けて小中高でも、教員が教壇に立って知識を教授する「一方通行型」の授業から、ディベートや課題研究を取り入れた「アクティブ・ラーニング（能動的な学習）」への転換が余儀なくされます。

20世紀の日本の教育は、正解を速く正確に当てる力『情報処理力』を徹底的に鍛えました。ところがバブル崩壊以降、成長社会は終焉を迎え、成熟社会に突入しました。このような社会では、自分で仮説を立てて自分で解決していかなければいけません。その能力を、自分の知識や、技術、経験の全部を組み合わせること『情報編集力』が求められます。

ここハワイに住む子供たちも日本の教育改革の影響は受けると思います。幸い、現地校では、早い時期から「情報編集力」に力を入れて授業が展開されており、本校の子供たちにはその力も付いてきています。その意味では、今まで以上に本校の子供たちが近い将来、世界や日本で活躍してくる期待は大きくなっていくと思います。これからも未来の宝である子供たちを保護者と一緒に育てていきたいと思っています。

「叱る」時の5つのポイント

子どもに教育の為には、時に保護者が叱ることは大切です。怒るのではなく、効果的に叱るために守りたいことを紹介します。私は、未だにうまく守れないのですが、冷静な時に意識したいと思っています。

- ①具体的に叱る。
- ②子供にも「どうしてこんなことをしてしまったのか」具体的説明させる。
- ③他人と比較しない。
- ④場合によっては叱るシーンを選ぶ。
- ⑤大きな声を出さず努めて冷静に叱る。



親も感情を持った人間です。つい感情的になり、守れない時もありますが、その時は、冷静になってから感情的になったことを子どもに謝り、改めて冷静に話してあげればうまくいくと思います。

第4期授業料の銀行引き落としについて

先週もお知らせしましたが、12月12日（月）に第4期の授業料の銀行引き落としを行います。年末で、出費多端な折ですが、各ご家庭におかれまして、準備の程、宜しく申し上げます。

